環境工夫の民家型デイ

「卒業」する利用者も

介護士と看護師の夫婦が2階建の自宅で始めたデイサービス「家デイ」（神奈川県横浜市）は、デイサービスを「卒業」する利用者などがおり、利用者が元気になるという。環境の工夫、「民家」の構造を活かしきっていることが特徴だ。

「卒業」したのは70代の男性で、家で再び入浴することが可能になったからだという。家デイで使用している浴槽は、垂直で埋め込み型の和風で古民家にあるようなものだ。

「洋風のシステムバスは、高齢者にとっては体が浮きやすく安定しません。和式の昔ながらの浴槽だとやや狭いですが深さもあるため、体が浮かずに安定し、肩までお湯に浸かることができます」（滝澤未来央代表）

浴槽と水平になる高さのシャワー椅子を置くことで、介護技術を活かしながら、足が上がらない高齢者でも浴槽へと楽に移乗することができる。シャワー椅子も、高さの調整が可能な物があり、家デイの環境を自宅で再現することは十分に可能だという。瀧澤代表は浴槽の深さや福祉用具、入浴の仕方を利用者に伝えた。結果、お金をかけずに自宅の環境を整え、デイに通わなくとも自宅での入浴が可能になったのだという。

また、デイのトイレは約1・8四方と広く、入口と並行して便器がある形式になっている。

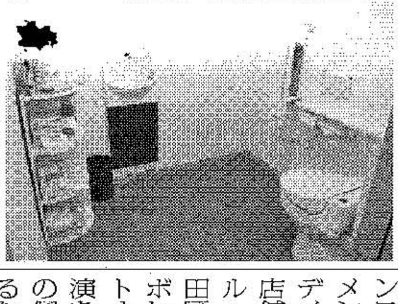
「車いす利用者はそのまま入ることができ、出るときも向きを変えずに済みます。体が壁に向いているため、介助者がドアをそっと開けて、さりげない見守りが後ろからできるのは利点です」

デイの見学に来るケアマネジャーに浴室やトイレの環境を説明すると驚かれることも多いという。

家デイの定員は9名で、5名と4名に分けた2単位の形式だ。1単位にしなかったのは、壁をなくして、部屋を広くすると「施設っぽさ」が出てしまうからだと滝澤代表は説明する。

滝澤代表は「在宅に一番近いのがデイサービスです。在宅の生活をデイで訓練することと、利用時間内だけでなく、その利用者の生活全般を支えることが小規模デイサービスの役割だと思います」と力を込める。

▶浴室。シャワー椅子と浴槽が水平になっている



▶トイレは車いすでも向きを変えずに入りやすい

失敗経営に学ぶ 介護・医療経営

「伸ばす」の視点が欠如

厳しい社風で事業拡大目指す

赤井堂は社長の祖父飯島が東京台東区上野で戦後創業したローカルチェーンスーパーだ。70年代・80年代は池袋の十全堂、亀有の大木屋、千住の菊水そして上野の赤井堂の4社は、それぞれ東京の下町の拠点を抑

第6回 欠点の解消に集中し、破たんしてしまった3代目社長

の女性に「奥さん今日は大根が安いよ」と声をかけるような下町的で、ある意味泥臭い商売が功を奏してか、台東区を中心に着実に拡大し、都内に30店舗を構えるチェーンになっていた。大きく伸びたわけではなかったが、赤井堂特有の、底抜けの明るさと、徹底したにぎやかさは全国チェーンもうらやむものであった。

祖父の商売を上手に継いだ、おだやかな性格の父飯

ぎた。だから店舗運営がだらしなく、全国チェーンになれなかった、というのが彼の考え方であった。まずは毎月1回の、店長会の親睦的で和やかな雰囲気を変えたいと思った。

各店の店長は30歳代の若者たちであった。飯島社長は早速、店長会において、各店ごとの、かなり詳細な目標の提出を要求した。各店長は戸惑いながらも、作成し、提出した。その翌月、目標実行の検討が行われた

店長会、同じ内容の店舗回りが実施された。1年後、店長会からも、各店現場からも、笑顔が消えた。業績は急落した。

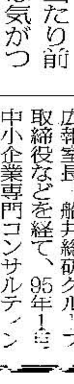
各店の店長は飯島社長から叱られるのを避けるために、飯島社長の指摘する問題点の解消だけに神経を集中していた。経営資源の乏しい中堅企業というものは、欠点を補うことよりも長所を伸ばさないと業績は伸びない、という当たり前のことに飯島社長は気がつ

た。

手続きを終えた今、自宅でくつろぎながら、50歳の飯島社長は、なぜ、業績が急落したのか、一体どこが悪かったのか、いまだに考えあぐねている。長い老後の始まりであった。

小林一博

1950年生まれ。日本大学法学部経営法学科卒。モスバーガー広報室長、船井総研グループ取締役などを経て、95年1[illegible]中小企業専門コンサルティン



「エンタメ介護」で利用者いきいき

トリプル・エース

ルーレット、脳リハダンスなどのエンターテイメント要素を取り入れたデイサービスを都内で5店舗運営しているトリプル・エース（東京都千代田区）は、劇団とのコラボレーションでストリートオルガンによる特別公演を開催したり、洋画家の個展を事業所で開催するなど、新しい取り組みを行っている。

4月23日、都内で行われた銀行のイベントで「りはびり空間プレミア・ケア代田橋店」の利用者14人が脳リハダンス、エルヴィス・プレスリーの「監獄ロック」を披露。会場から手拍子が起き、大きな拍手を浴びた。利用者からは「緊張したけど、とても楽しかった」などの感想が聞かれた。

脳リハダンスは身体を動かすことで脳を活性化させる「脳科学理論」に基づいて専門機関と共同開発したもの。

3ヵ月に一度曲目が変わり、今まで、ビートルズの「オブ・ラ・ディ・オブ・ラ・ダ」など、様々な曲のダンスを行い、発表会も行っている。これは、毎週少しずつ覚えたダンスの振り付けを家族やケアマネジャーに披露するものだ。

4月22日から5月1日まで、「プレミア・ケア阿佐ヶ谷店」で洋画家の金子琢磨氏の作品を展示した。トリプル・エースの中澤宏晃副社長は「足が不自由で美術館に行けなくても、デイに来ることで絵画を見るという感動を味わうことができる。今後、写真家ともコラボレーションする予定です。写真を展示することで『ふれあい共想法』のような認知症予防ができればと思います」と語る

施設用の家具備品は通信販売のニッセンにおまかせ!